板書例

【展開順】

1　第一段　起

○エノモトさんからの相談

エノモトさん

画家兼高校教師
「わたし」の部屋の真上
地区の自治会の役員同期きっかけ
ときどきコーヒーをごちそうに
世間話
＝そのくらいの仲
（近過ぎず遠過ぎない）

二か月前　妙なものを手に入れた
←
←コーヒーの誘いがない
←
二か月後　桜が咲き始めていた（春）
花びらは、水に浮いてふよふよ
＝そんなこんな（物語の引き金）
←
エノモトさんから電話
相談に乗ってもらえないか

2　第二段　起

○人魚を手に入れたいきさつ
何かの匂い
少し痩せたか

わたし

一緒に笑い、コーヒーを飲んだ
（感情の共有、コーヒーで繋がり）

「二か月前ね。」と始めた。
（読者の関心を引く）

エノモトさんの話
南方に旅
真夜中、海岸を歩いた
網の中になにかいる
中のものは動かない
生きているらしい
人間の大人の三分の一ほど
＝それは人魚なのだった

淡々とした描写の連続
人魚の克明な外見（リアルさ）

3　第三段　承

○エノモトさんと人魚
浴室にわたしを招き入れる
（秘密の共有）

人魚

潮の匂いが強かった（リアルさ）
このひと、と言いなおした
人魚のそばを離れたくなかった
（執着／魅了はじまる）

エノモトさん

民宿の部屋に連れ帰った
交番に届ける（人扱い）

わたし

拾得物の処理方法（物扱い）

○人魚への執着
気はそぞろ
目が離せない
人魚のそばにいれば落ち着く
五回も欠勤（社会生活に支障）

「行きたくてしょうがない」
←言ったとたん
二人で、争うように、浴室へ

○エノモトさんの異変

エノモトさん
預かってほしい
人魚を海に帰す―知らないふり
浴槽の横から動こうとしない
目に、光がない
黙って睨んでいる
（手放す瞬間に最も葛藤）
←
←真夜中まで
←
突然大きな音
ころがるように出てきた
うわあ、というような声
部屋から走り出ていった

人魚
コップに浮かせた桜の花びら

4　第四段　承

○「わたし」と人魚
人魚を預けられて数日
人魚を眺め
のそばになるべく長く座り
と共に眠った。
（人魚への執着が段々と強まる）
←
エノモトさんと同じ状態
浴室で暮らす
電話が鳴っても出なかった
（外部との遮断）
エノモトさんとは僅かに喋りたい
←人魚を預かって一週間後
いけないとぜんぜん思わない
（完全に魅了される）

エノモトさん
「人魚を取りに来た。」
（物扱い、執着が弱まる）
わたしの手を引く
（秘密、執着の共有者同士）
←
（車で）そのまま、海まで走った

5　第五段　転

海岸沿いの桜並木
花びらがひっきりなしに散る

わたし・エノモトさん
弱々しい声
まなざしが落ち着かない
甘い声
ぼんやりとした口調
＝わたしたちは離れられない
←
エノモトさんの笑い
ついに人魚を海に放り投げた

人魚
わたしだけを見ている
「離さない」

わたし
うわあ（恐怖）
耳をふさぎ、砂に顔をうずめた

人魚はいつの間にか去っていた
降りそそぐ桜の花びらを眺める

6　第六段　結

桜はすっかり散っていた

「魅入られたね」（受動態）

人魚をはっきりと思い出せなかった
桜が散る様子を克明に覚えている

あの言葉「離さない」

黙ってコーヒーをすすった
（執着＝魅了の共有者同士）
←
離さないでいるだけの強さがない
（人間性を失う恐怖に耐えられない）
（人魚を帰せた理由）

若葉が芽吹いていた
風が新緑を揺らしていた
（時間の経過、桜の幻想の終わり）